

# アリスの物語

rashita2

すべての節項目に、2010年代のITを想起させる「スマート」がついていることに、違和感が感じられてしまいます。  
端的に「タスク／リーダー／アピアランス（ファッションから転じて）／ショッピング……」のようにしてはいかがでしょうか。

## 目次

1. スマートタスクリスト
2. スマートリーダー
3. スマートファッション
4. スマートショッピング
5. スマートウォッチング
6. スマートボード
7. スマートパートナー
8. スマートアタック
9. スマートジョーク
10. スマートトラップ
11. スマートリカバー

シーンの冒頭部分で情報を増やすことでSFらしさが立ち上がってきます。

細々と描写するのではなく、動作や会話の中に現代とは異なる印象を埋め込むと今のスムーズな読み心地を変えずに伝えられます。

例）アリスが姿を現す→デスクの脇にアリスが投影される。

どのようにして天候を知ったのかを記述することで、描写に厚みが出ます。窓があるのか、それとも情報表示機器から読み取ったのか、アリスが文章の外で伝えたのか。

例えば、アリスが言ったことにする場合。

（例）～黒のジャケットだ。アリスは[地名]の午前、午後の降雨予測を口にした。

「10%……晴れか。気分よく～

## 1. スマートタスクリスト

「おはようアリス」

『おはようございます。マスター』

いい導入ですね

私が声をかけると、アリスが姿を現す。いつも通り長めの赤いブリーツスカートと白のブラ

ウス、それに黒のジャケットだ。

「今日も晴れか。気分良く仕事が始められそうだ」

と同じ  
とする方がスムーズです。

『それはなによりです』

「さっそくタスクリストを作成してくれ。モード”平日”で頼む」

このシーンは平日ですので主人公に言わせる必要はありません。特に、すぐにアリスが言うので不要です。

『了解しました。モード”平日”にてデイリータスクリストの作成を開始します』

この「私が」は不要です。

なくても「マスター」が主人公の一人称小説だとわかります。

第一節だけ、地の文の冒頭に字下げがありません。特に狙ったものがないのであれば、一文字下げましょう。

心拍数と脈拍は同じです。

SFらしく、現在はあまり気にされたいような項目を追加しましょう。この話ならば、「ネットワーク適合ニューロン」などがあるとソレっぽいですね。

アリスの”目”がこちらを向く。

『体温、心拍数、脈拍、脳波ともに平常値の範囲内です。マスターの体調を”元気”と判定しました。何か追加で考慮すべき要素はありますか』

「まったくない。元気そのものだよ」

『了解しました。”平日”、”元気”のパラメータに、”火曜日”、”21日”のパラメータを追加します。リマインダーをご覧くださいになりますか』

「ああ、見せてくれ」

目の前にウィンドウが立ち上がる。

「重要度大だけを表示、それに先週以前に追加したものは消してくれ」

リストの項目が3つに減る。 ”ヤマトに契約書送信”、 ”アリスのアップデート”、 ”トマトケチャップを買いに行く”。 そうだ、もうス... が無くなっていたのだった。あの偏屈なじいさんの店に行かないと。

「アリス、ケチャップ購入をタスクに追加だ。リマインダーはもういいよ」

『了解しました。これでリストのパラメータを確定させますか』

そうしてくれ、と言いながら私はドルズショップの棚を思い浮かべる。

どれだけ店主が偏屈でも、品揃えに一流のこだわりがあればこのご時世でも小売店がやっていける、と証明するご立派な棚だ。

いつの時代でも食にこだわる人間はいるし、そこにお金は湯水のように注がれる。人はどんな快楽にもいずれば慣れてしまうが、食事と縁を切って生活していくことは不可能だ。

「今日のはあの店定休日じゃなかったよな」

『はい、マスター。ドルズショップは毎週水曜日が定休日、と登録されています』

だったら、今日行っておかないと。

『タスクリストの作成が終わりました。買い物時間を考慮して、通常の80%で構成してあります』

「80%？えらくタイトスケジュールだな。あの店はそんなに遠くないだろう」

アリスに計算間違いがあるとは思えないが、さりとて前提条件を誤れば結果も誤る。確認は必要だ。

『これまでのログを考慮する、マスターはドルズショップに長時間滞在することが想定されます。平均買い物時間のおよそ200%というのが私の推測で、それが反映された結果です。』

今日の、とか入れると臨場感が出ますよ。

「マスター」が事細かに指示しないとタスクとリマインダーが動かないことに若干の違和感を感じます。  
ここで提案です。  
「アリスの物語」と題名がつけられているお話ですが、アリスが規約を犯してまでマスターに肩入れする理由とその様子が序盤で示されています。その第一弾をここで入れてはいかがでしょうか。  
タスク、リマインダーを標準以上に手際よく並べてくれる「アリス」にマスターが満足しつつ、ちょっとだけ違和感を感じるような描写ができないのでしょうか。  
例えば.....  
目の前に浮き上がったウィンドウにタスクリストが表示された。業務タスクの中にある、入れた覚えのない項目に私は目をとめた。  
〈ケチャップ〉  
確かに最後の一本が切れるところだ。フリーザーも管理しているアリスが、勝手にタスクを入れていたのだろう。しかも通信販売で自動発注するのではなく「買いに行け」という。アリスのAIらしからぬ”気配り”が嬉しくなった。  
偏屈なじいさんの顔をそろそろ拝みかけたところだ。

具体的な時間を指定しましょう。  
そうすることで、街の広さ、マスターの行動する範囲を読者は思い描くことができます。

冗長な自分語りは削除したほうが、読者は主人公に同調しやすくなります。マスターの違和感は、セリフで十分に表現されています。

で読める程度に  
としておくと、現在のITからの距離が実感で  
きます。

造語の初出は〈オレンジ〉のようにしておく  
とわかりやすくなります。ただ、オレンジは  
いただけない。アップルからの類推なので  
しょうが、陳腐に感じます。それに、オレンジ  
はヨーロッパの携帯電話キャリアでもあり  
ますね。  
造語選びはSFの醍醐味です。もう少しひねっ  
てみてください。

新機種発表なのに「一つでいい」というつま  
がりが読みにくいので、削除してもいいので  
はないでしょうか。  
続く「その他はすべてシャットアウトだ」で  
十分に伝わります。

第二の大きなポイントです。  
第一節の末尾であるここで、「アリスの物語」  
にするために、幸運を呼びかけてくるア  
リスの行動を読者に軽く印象づけておきま  
しょう。

これはrashita2さんの方向性次第で、私の提  
案をそのまま容れる必要は全くありません  
が、この物語を「アリスの物語」にするた  
めに、私ならばこうする、という例として読  
んでください。

アリスが普通のAIのとらない行動をとること  
が物語の最終段階で示されます。それが普通  
でないことを示すために、さりげなくできる  
ことはいくつかあります。マスターを普通の  
AIとは異なる方法で慕っている、という印象  
を与えておくことを選ぶでしょう。そのため  
に私ならば、  
〜いつから、こんな口の利き方をするよう  
になったのだろう。  
のように主人公に述懐させるでしょう。  
エンターテインメントとしてドラマチックに演  
出するならば、マスターの口癖として「〜愛  
してるよ、アリス」のようなことを「潤滑油  
のようなコミュニケーション」として言わせ  
るかもしれません。日常的にその言葉を聞い  
ていたアリスが変質していたという方向で  
す。ちょっとクサイですが、わかりやすくは  
あります。

rashita2さんが、私の思いがなかったよう  
な方法でアリスの動機に説得力を与えること  
を期待しています。

リストを再構築なさいですか』

ここ、すばらしい！

怒りも皮肉もない声で冷静に事実を告げられると、心の持って行き場がなくなってしまう。

アリスの指摘する通りあのじいさんと話し出すと時間を忘れてしまうのだ。どうせ、今日も  
そうなるだろう。

ニュースフィード、ぐらいいは必要かと思えます。

「いや、再構築は構わない。これで行こう。じゃあ、ファーストタスクから取りかかろう  
か。20分のタイマーをセットしてくれ。あと、その間にフィードのフィルターを頼む。今日  
はのんびり読んでいる暇もなさそうだから、10分程度にまとめておいてくれ」

『了解しました。何か優先事項はございますか』

「そういえば、昨日はオレンジの新機種が発表されたんだったな。オレンジ関連の記事は一

つでいい。その他は全てシャットアウトだ。その代わり株価関係をピックアップしておいて  
くれ」

不要だ、という動作を書き、セリフでも言わせているのが冗長で  
す。例えばですが……

『どこかご希望のサイトはございますか』

アリスが表示したリストを「いらない」と告げて右にスライドさ  
せ、視界から追い出した。

アリスがサイトのリストを表示させる。が、私はそれを右にスライドさせた。

「いや、リストはいいよ。ワヨーフアルティメットでいい。じゃあ、タスクに入るよ。タ  
イマーを起動してくれ」

カタカナが続くので「始めるよ」ぐらいにしては？

『了解しました。では、フィードのフィルタリングを開始します。グッドラック、マスタ  
ー』

アリスはそう言い残し姿を消す。チコチコなるタイマー音と、AIに幸運を願われるというの  
も不思議な体験だなという私の思いだけが部屋の中に残った。

## 2.スマートリーダー

ピピピピッ、ピピピピッ。

小さいが、注意を向けずにはいられない音が鳴り響く。朝一タスクの時間終了だ。

私は作成したデータを確認する。まずまずだ。これだけ進めておけばプロジェクトに支障  
はないだろう。

どう送信したのか書きましょう。  
共有した旨を「よろしく」というメッセージ  
と共に送信した。

ソフトを操作する、という意識を持たせない  
方がスマートです。「終わったよ」と言わせ  
て、アラームが勝手に止まるような描写だと  
スムーズですよ。

コーヒーと実体のないアリスに関する述懐から、  
実体のある陶器のカップへと主人公の視  
点が動いています。  
いい流れです。  
が、この視点の流れを邪魔するものがいくつ  
かあります。  
最後の「黒色の液体～」が唐突にコーヒーと  
たった一人の人間「マスター」へ意識を戻し  
てしまっているのがもったいない。  
真ん中のニュースウォッチを始めるセリフ  
も、後ろに追い出すといいでしょう。

タブロイドは現在も存在する用語です。新聞  
の判型でもあり、劣位メディアを示す言葉で  
もあります。「タブレット」を使いたくない  
気持ちはわかりますので、なにかしら別の用  
語に変更することをお勧めします。

繰り返になりますが、直接アリスを操作して  
いるコマンドがセリフに現れている部分が  
読者の想像力を奪い、安っぽさを感じさせて  
しまいます。  
ここは地の文に追い出してしまった方がいい  
と思います。

ウインドウ、窓と同じものを示す言葉が単語  
を変えて登場しています。別のもののなか、  
比喩なのか、意味なのかを読み取りにくくな  
ります。  
「同じフォーマットに整形されて並ぶ」ぐら  
いライトにしてもいいと思います。

窓は建物の外側に設置されます。主人公の述  
懐は詩的な表現を差し込むチャンスです。  
もう少し練りましょう。

A、B、Cのように要素を並べるときには、先  
頭か最後の項目を特別扱いしてリズムを整え  
るといいですよ。この場合、最後の項目に  
「そして」を付けるとリズムが生まれます。  
タイトル、300文字に圧縮された要約、そし  
て記事ないの画像が添付されて

マークした範囲に二つの文があります。前半  
は一般論、後半はマスターの感想なのでしょ  
うか。フォントの下りは段落を分けて、次の  
段落につないだ方がいいかもしれません。

前の段落と書き出しがかぶっています。不要です。

私はデータをピットに投げ込み、共有した旨を送信しておく。もちろん、こんなメッセー  
ジがなくとも向こうには通知が飛んでいるだろうが、儀礼的なやりとりはいつの時代でもコ  
ミュニケーションの潤滑油になる。送っておいて損することはない。

「アリス、タイマーストップだ。あとコーヒーも頼む」

『お疲れ様です、マスター。コーヒーは15秒後にできあがります』

室内に豆の香りが膨らんでくる。実に香ばしい。もちろんホログラフィの彼女にコーヒー  
を運んでもらうことはできないので、自分でコーヒーメーカーに向かい、彼女に勧めること  
もなく一人分をカップに注ぎ入れる。

「さて、ニュースウォッチの時間といこうか」

一口飲んだカップをテーブルに置くと、カチリと音が響き渡る。割れる危険性はあるもの  
の、この音の響きを感じるためだけに陶器のカップを使っている人は少なくない。実体を感じ  
られるというのはよいものだ。セーブしたかのような安心感がある。黒色の液体はこちら  
を見つめ返すことなく、無言で揺らめいていた。

『タブロイドとウィンドウのどちらになさいますか？』

「ウィンドウで頼む。今日は数が少ないからワンセルビューで。あと、センシティブニュー  
スだけタブロイドに転送しておいてくれ。移動中にでも目を通すよ」

『かしこまりました』

アリスが丁寧に辞儀をしてから姿を消す。これもコミュニケーションの潤滑油といった  
ところか。

「まずはオレンジの新機種のスぺック周りから」

私の前にウィンドウが浮かび上がる。個人サイト、ブログ、ニュース記事が同一フォーマ  
ットに変換された窓だ。建物内に設置された窓は常に同じ風景を切り取るが、このウィンド  
ウもウェブの世界を同じように切り取る。どのようなソースであれ、タイトル・300字以内の  
要約・使われている画像を抽出し、一定の形式にまとめてしまう。人間の限られた認知リソ  
ースから言って、この形式がニュースを追いかけるのに一番適している。以前、誰かが遊び  
でニュースサイトの記事を全て別々のフォントに書かしてしまったことがあるが、あれはま  
ったくもって読みにくかった。

もしかしたらバカなデータ解析者があの事象から、フォントをバラバラにすればアクセス

「アークソフト」は本書に一回しか登場しません。今後も絡んでこないで、ここは競合と書いて、次のアリスのところで「アークソフト」としてはどうでしょう。

アークソフトの

この文は視点が不明なところから始まります。「5分間」がスピーチなのか、聞いていたマスターの時間なのかをはっきりさせましょう。結局五分間のスピーチを聞いても……と始まれば「得られなかった」と結ぶことができます。

どんな書き込み？  
揶揄するようなコメントを中心に、とかあるといいですよ。

否定的なのか、肯定的なのかわかりにくい文章です。余計なところまで書けば否定的に、うまく読むと書けば機知に富んだと印象づけられます。おそらく、前者なのでしょう。せっかくの述懐なのですから、ここでマスターの心理を端的に表現する一語を差し込みましょう。

このセクション、最後のマスターの動きがわかりにくい。ジワジワあげている銘柄を探せ、というところから、隠されたデータまでの飛躍が大きいので、ストレスを感じてしまうのです。動くはずの銘柄が注目すべき動きを見せないから、異常に気づいたというような発火点が必要です。入れるのならば、CEOの話題が終わりかかった、ココです。

数がアップする、なんて結論を出すかもしれないが、ヘッドライナーで話題になっただけで誰も中身は読んでいなかったに違いない。スタイルの統一というのはメッセージの伝達において重要な要素なのだ。  
もはや読者はオレンジの新機種の話忘れてます。直前に、そのニュースに目を通して

「これが新機種が・・・。さすがにイノベーションリーダーだけはあるな。予約状況の動き、サーバー・アクセスの時間帯別動向表、関連企業の株価のデータを揃えておくれ。ア

ークソフトから何かコメントは出たのか」

『CEOがコメントしていますが、フィルターで取り除きました』

アリスが声だけで答える。

「なんだ、聴く価値なしってことか。まあいい、一応表示してくれ」

『かしこまりました』

どこかの動画サイトにアップされたCEOのコメントが再生される。ゆっくりと一言一言を染みこませるように言葉を発している。喋ることがないで、<sup>トル</sup>周りが持たないのだろう。結局五分間で、「うちとしては後から追いかける以外の手はありません」、という内容以上のものは何一つ得られなかった。

「この動画、ヘッドライナーで話題になってるんじゃないのか？」

『すでに200の改変動画が作成され、10万ビューを記録しているものもあるようです。その動画について、<sup>「それ」</sup>の書き込みは多いようですが、それを除けばヘッドライナーでの流速は10分におよそ100です』

「そんなところか」

「おそらくそれ以外の話題で盛り上がってるんだろう。あのオレンジの新機種は何かしら発言せすにはいられないチャームがある。しかしながら、あのCEOは別のところで話題を作るのがうまいな。喋ることがないのならば、ノーコメントを押し通しておけば角が立つわけでもあるまいに。まあ、それも一つの才能かもしれないが。」

「よし、こんなところか」

ウィンドウを右に払うと、代わりにアリスが姿を現す。

「先に買い物に行ってくるよ。その間に関連企業のデータを洗って<sup>おいでくれ</sup>過去半年から一年でジワジワ株価を上げている企業を探せ。それ以前と比べると、僅かだが取引量・株価とも上がっている銘柄だ。あと、今後のフィルタリングは関連企業について広く集めるようにしておいてくれ。踏みつけないようにしつばを見つけないとな」

マスターがなんらかの「危機」を察知していることをここで示すと、読者の意識が危機に向かいます。次のアリスのセリフは設定の変更に終始しているので、次のマスターのセリフに入れた方がよい結果を生みます。

指示語「それ」が明確ではありません。僅かだが～の文も含め、なくても意味がわかりますので不要かもしれません。

ここでアリスの初回の出番が終わります。ここまでの間に、アリスが最後にマスターを助けるための動機を匂わせるなにか、他のAIと異なるなにかを描きましょう。あとは、必要以上に描く必要はありません。読者にとってはほどよく忘れた頃に、アリスが登場して「アリスの物語」として完結します。

造語の扱いについて、本作で最も気になったのがこのBASです。この後の社内の描写から察するに、BASは「バス」からの類推なのでしょうが、これはよろしくありません。特に造語が思いつかなければ「シティ・コミュニケーション」とするか、カタカナの「パス」として、呼び名は20世紀から変わっていないが中身は全くの別物だ、とするとかにすることを強くお勧めします。

BAS（あるいはバス）が重なっているのと、他のチャプターで登場するウィンドウが全く別の意味で扱われています。そして、世界を覗く窓という意味も重ねられています。ここは「車体の進行方向にある大きなキャノピー」としてもいいような気がします。

『かしこまりました。データの分析及びフィルタリングの設定変更を行います。設定変更の反映は明日からでよろしいでしょうか』

「いや、今日、というかたった今からだ。すでにきな臭い話題が飛んでいてもおかしくはな  
株価などの話で、読者の意識は既にオレンジ新製品から離れています。ここは具体的に「世界中が注目する新しい」製品のような話題の裏では」ぐらゐの具体性をもって書きましょう。

こういう大きな話題の裏では、確実に仕込んでいるヤツがいるはずだ。それに美味しく乗  
つかるでしょう。そのためには、データから隠された意図を読み取らなければいけない。何  
かを埋めた穴を不自然に見せないように平すと、その他の部分との差異が出てきてしまう。  
自然の地面は真っ平らではないのだ。  
なんの「データ」でしょうか？ いつ「マスター」は隠された意図に気づいたのでしょうか。

「じゃあ、ケチャップを買いにいつてくるよ」

アリスにそう言って、私はタブロイド端末を抱えながら部屋を出た。

ここは「抱えて部屋を出た」で。

### 3.スマートファッション

街に出ると、私はすぐさまBASに乗り込んだ。

歩いて行けない距離でもないし、日頃の運動不足を解消する絶好の機会でもあるが、今は  
情報収集の時間を目減りさせたくない。どれだけ健康でも、食い扶持が無くなってしまっ  
ては元も子もないのだ。  
時間と空間  
がいいと思います。

席に着くと、動き始めたBASのコンソールに到着地点を送信する。B区画のギリギリに位  
置するあの店はBASを降りて多少歩く必要がある。な、今のところはただ座って待っている  
だけだ。これほどタブロイド端末を読むのに適した時空間は存在しないだろう。

私は端末が記事を表示するまでの数秒間、BASの前面にある大きなウィンドウを通して街  
の風景を目に入れる。何も変わらないように見える街並み。何も変化していないかのような  
風景。しかし、私たちの足下の地球だって動いているような気はしない。その感触がしない  
のは、私たちがそれと同じ速度で運動しているせいだ。きつとこの街並みだって同じような  
もののだろう。  
手前

ウィンドウの手前には緊急時用のハンドルが居心地悪そうにたたずんでいる。試用以外で  
使われたことはなさそうだ。なにしろこのシステムは完璧なのだ。完璧にコントロールされ  
た自動運行システムは、渋滞や事故とは無縁の存在である。それにわざわざクラッキングを

「半世紀以上」、あるいは「半世紀も」のいずれかがいいと思います。

「ショートで売り抜ける」人がいればテロ活動が行える理由が、ここまでで文中で示されていません。  
この文脈では不要な気がします。

仕掛けるような対象でもない。テロなんて割に合わない活動は半世紀以上も前に姿を消した。結局の所、ショートで売り抜ける奴らと、軍事産業の潤いが無ければ、テロ活動なんて誰も行わない。というか、続けられないのだ。国家だって、議会が承認しなければ戦争の予算はおりてこない。宗教心や正義はエンジンにはなるのかもしれないが、ガソリンがなければ何も動かないのがこの世のシステムである。

ここでは「カネというガソリン」ぐらい書いた方が伝わります。

「そろそろ、うちのシステムにもガソリンを入れたいところだな」

一人つぶやきながら、タブロイド端末のページをめくる。アリスがまとめてくれたセンシティブニュースの数はおよそ五百。時間がかかるわけだ。普段は二百以下なことを考えると、倍以上の話題が飛び出していることになる。世の中がざわついている、つまり二つの、と始めたのですからペアになる文章を対にする方がいいでしょう。

「一つは重要なニュース」みたいな感じです。

センシティブニュースには二つのカテゴリーがある。一つは、主要国家の経済指標や通貨について。あるいは大企業の決算情報や株価に影響を与えそうな事件。この業界の人間だけでなく、価値を生むビジネスを行っているものならば知らないだけで沈没（ダウン）してしまうようなニュースだ。

もう一つのカテゴリーは、ホットなニュース。ゴシップ記事を含め、プラスであろうとマイナスであろうと、とにかく人々がそのことを口にはせずにはいらなかった話題。それを分解、抽出、解析したものだ。政府のお偉いさんが、一生を三回繰り返しても目にしないような話題が盛りだくさんである。

どちらが情報として優位ということはない。片方が物無しになることもあれば、もう片方が土台になることもある。情報を別の情報で規定し、加工し、補強し、組み立てあげる。必要なのはその工程であって、分類ではない。マクロやミクロなんて物言いは、それだけで飯を食える人間だけが使っていればいい。ようは儲かるかどうか。それこそが私にとってのリアリティだ。

「アリス、話題のサイクルから不自然に突出しているものはあるか」

私が端末に呼びかけると、タブロイド端末の隅にイラスト化されたアリスの姿が表示される。エージェント機能を優先するために、ヒューマンインターフェイスとしての機能は最小限に落とされているが、命令の伝達および実行に支障はない。

『はい、マスター。5件の話題がこれまでの流行サイクルから大きく逸脱しています。5つと

行頭空白

全角に

意識の誘導がここで大きく跳躍しています。話題のサイクルから突出したものを探す  
↓  
5つ発見。  
↓  
「アリスに「綺麗な」～」の段落で不自然な「話題」に関する述懐。ここで「話題」が「意図された流行」だと記述。ただし、流行に対するマスターの述懐で弱められる  
↓  
イノベーションに関する述懐。流行もそこに追加されているとある。一般化された話が続いたため、読者は5つの話題＝流行の意識を保てない。  
↓  
さらに「消えゆく存在」の段落で話題と流行が一般化される。  
↓  
そして「その特異的な話題はあまりにも波が大きく」と具体的なところに戻ってきます。この跳躍が厳しく感じます。もはや、5つの話題が意図された流行であったことは一般化された流行の波の話に飲み込まれてしまっています。  
このような跳躍を簡単に取り戻す方法は、遠くの話題を示す指示語をやめることです。「その特異的な」を「アリスが抽出した5つの話題は」とすることで、読者はすぐにメインのテーマを思い出すことができます。ただ、それだけでは唐突ですので、その手前に一つのまとめを入れておきましょう。私の文章ですので、若干世界観が違います。が、.....。

消えることを宿命づけられた流行と話題の波が私達を揺る。それが、今の私が生きる世界だ。  
しかし、アリスが抽出した5つの特異的な話題は

もちろん、このように修正しなければならない、というわけではありません。思弁的な叙述を現実のアクションに取り戻すための、一つの例です。  
rashita2さんならば、他にももっと作品にフィットする方法を見つけ出せると思います。

「ゼロに帰す」は表現としてこなれていません。無に帰す／なくてもいい／ゼロということだ などの言い換えが欲しいところです。

も情報偏差が80を越えていて、現在もその数字をキープし続けています』  
「自然減衰はまったく見られないのか」  
『はい。綺麗な平行線が引けそうです』

「平行線」というのは二本の直線を想起させます。  
推移は、綺麗に平行な線を描いています。くのようにするといいかもしれません。

アリスに「綺麗」という概念が理解できているのかも気になるが、それ以上にその不自然な話題の存在が気にかかる。明らかに意図されたものだろう。といっても、その他の話題も意図された流行には違いない。消費を支えているのは流行なのだ。流行は盛衰しなければならない。その波は話題によって絶妙にコントロールされている。古い話題が消え去り、次の話題がやってくる。そして、時間が経てば古い話題が新しい衣をまとって登場する。その繰り返しなのだ。

製造とイノベーションが結びつきにくいところです。「新製品の設計」であれば、現代と異なりそれが効率的に管理運営されている様にイノベーションが必要ないことがアイロニカルに表現できます。

製造もそのサイクルと綿密な連携を持って、超効率的に運営されている。もはや、だれもそこにはイノベーションを求めている。太陽が昇り、やがて沈む。それと同じだ。人類が豊かになっていく段階で、衣食住という出費項目に趣味・嗜好が加わった。現代では、流行もそこに追加されている。

「流行など」ぐらいのことは、ここなら書いてもいいですよ。

誰もが、これは消えゆく存在だと知っている。そして、知りながらも一時的な熱狂の消費に身を任せる。おそらくそれがなければ、私たちはもっとバラバラな存在になっていただろう。最終的に行き着く先はただ個として存在するしかないマトリックスの揺りかごだけ。話題と流行がそれを押しとどめているのだ。

しかし、その特異的な話題はあまりにも波が大きく、強すぎた。これでは打って返すことなく、津波のようにはや現実にはそれを見た人は誰もいないが、地面を浸食してしまう。マーケティングとしては明らかに悪手だ。それが同時に5件。これを偶然と考えるやつは、投資家どころか安楽椅子探偵にもなれやしないだろう。

「——」に

問題は、これら5つ全てがカギなのか、それとも4つが隠れ蓑で、どれか1つだけが本命なのかということだ。木を隠すには森の中。話題を隠すには、流行の中。

A

「アリスは、どちらだと思う？」  
『申し訳ありません。質問およびその意図が理解できません』  
「ありがとう。その答えを期待していたんだ」

もしアリスがこれに答えられるようならば、私の存在価値などゼロに帰してしまう。これを読み解けるのは、それを作った奴らと同じ存在だけだ。

指示語が、存在、奴らなどのまだ不明な対象と共に頻発しています。冒頭の「これ」はなくても構いません。二つ目の「これ」はそのまま、最後の「それ」は作られた話題か、それともAIであるアリスかを明確に。

この段落、意図が掴めません。ニュースの中に浮かんだ一つの例、ということでしょうか？

ここで再び「特異な5つの話題」へ戻ります。この内容なら先に言っておいてもいいはずですし、不自然、自然という前段の考察から後戻りしているように感じられます。注釈で示した位置に挿入することをお勧めします。

Aの位置へ

私はニュースを上から下に流しながら、視点をぼやけさせる。読むのではなく、眺める。そして、そこからパターンを読み取る。不自然なものは、はっきりわかっている。仕掛けた奴らもそれがバレることぐらいは想定しているだろう。何かトラップがあるはずだ。

可愛い猫の画像が私の目に止まった。本当によく繰り返される話題だ。猫が小さな皿に載せられている。猫皿、という安直なネーミングセンスは、おそらくその皿が話題に乗りやすいという意図なのだろう。あらかじめサイズを測って作ったかのようにその皿は猫にぴったりだった。私は、猫のように可愛いAIに指示を出す。

「アリス、特異な5つの話題だけをピックアップしてくれ」  
『かしこまりました』  
アリスがそう答えると、タブロイド端末の表示が替わり、クラウド状にまとめられた話題が浮かび上がる。どの話題にも共通点はなく、どの話題もそれっぽい感触がする。投資家心をくすぐるのだ。実に見事なトラップだと言っていいだろう。5枚の扉が目の前に現れたら、どこに宝箱が眠っているのかつい考え込んでしまう。

「アリス。もう一度ニュースを抽出してくれ。今度は話題のサイクルに乗っているニュースだけでいい。その中に情報偏差がまったくない、自然な\_\_\_\_自然すぎる話題はないか」  
『かしこまりました。少々お待ちくだ・・』アリスが言葉を紡ぎ終える前に、『はい。1件見つかりました』と新しいアリスの声がそれを上書きする。処理する端末とヒューマンインターフェイスの端末の能力差による現象だ。だが、今はそんなことはどうでもいい。  
『理想のモデルのように、ぴったりと話題のサイクルに乗った話題があります。情報偏差はゼロ。コンマ以下のズレ也没有ありません』  
アリスがそう告げた瞬間、BASが止まり、到着を知らせるアラームが鳴り響いた。

#### 4.スマートショッピング

N区画の最辺境であるこの一帯は、区画整理という言葉が完全に崩壊している。隣がB区画なこともあって、お偉いさんが誰も住んでいないのが問題なのだろう。人間の血液だって、全身に等量巡るわけではないのだ。

何度訪れても、ドルズショップへの道順は覚えられない。今だって、自分がどこを歩いて

等量が巡る

ひょっとすると  
の方がこの文脈ではスムーズです。

いるのかまったくわかっていない。小動物のように新陳代謝が早く、街の外観が一定して  
ないのだ。人は目印がないと、なかなか道を覚えられないものである。あるいは、優秀なナビ  
ゲーションシステムの登場によって、人類の方向感覚スキルがDNAから欠損したのかもしれ  
ない。

私は、アリスが示す通りにN区画を進んでいく。埃っぽく、活気に満ち溢れ、そして猥雑  
だ。良くいえば生命力を感じるし、悪くいえば混乱している。ここでは直接的な売買がいま  
だに盛んで、罵声に混じってあちこちから売り込みの声が聞こえてくる。少しでも立ち  
止まれば、あるいはちょっと興味の目を向ければ、アリジゴクのように嘔みついてくるだろ  
う。いささか足に疲労を感じないではないが、私は立ち止まることなくアリスの指示に従っ  
て歩き続けた。

レアな「いささか」が短い間隔で二度も登場します。  
片方を消しましょう。

ドルズショップの正面まできて、ようやく一息落ち着ける。ここはずいぶん静かだ。喧  
噪は、四回ほど壁に反射したテニスボールのように勢いを失っている。かすかに上昇した体  
温をアリスが警告してくれるが、もちろん問題はない。私は前に突っ立っているだけでは開  
かない扉を、ぐっと力を込めて押した。

文中で転換するときは「——」二倍ダッシュを使いましょう。

「いらっしやい。おや、久しぶりじゃないか」

店内に足を踏み入れた私の姿を見るなり、マスターが声をかけてくる。顧客データベース  
にアクセスして確認、しているわけではないだろう。経営が成り立っているということは、  
少なからずのお客がお店を訪れているはずだが、それら全てを記憶しているのだろうか。い  
ささか信じがたい。

「ケチャップが切れてしましましてね。今日はその補充に来ました」

「ちょうどいいタイミングに来たね。ついてるよ。上等なケチャップをつい最近入荷したば  
かりなんだ」

「毎回、それ言いますよね」

苦笑混じりに返す。宣伝文句なのだ。

素敵な会話です！

「そうさ、実際、君はいいタイミングで来てるんだよ」

「じゃあ、もし明日もこの店に来たら？」

「そりゃもう、いいタイミングさ。なんたってうちは毎日上等なケチャップを入荷してるか  
らね」

蓋を閉めた瓶からでも漂う  
がいいと思います。

主語につく助詞「が」は、「事前に説明をしたこのような」～が、と使うとスムーズです。例えば「マスターに目をやった私が」ならスムーズです。逆に、そうでないとき、単純な主語のじょしとしては「は」の方が自然に感じます。  
ここは「は」がいいでしょうし、それどころか「私が言った」自体が不要かもしれません。  
「以前から聞こうと思っていたんですが——」  
のようにしてしまうのもアリですよ。

「ものは言いようってわけですね」

「詐欺で訴えるのは難しいだろうさね」

二人して笑う。マスターは何歳ぐらいだろうか。見た目は50をゆうに超えているが、もちろん見た目と実年齢に相関はない。いくらでも若い「身体」を手に入れることができるし、その逆も然りだ。でも、しゃべり方、言葉遣い、間の置き方、そしてユーモア。こうしたものは経験がものをいう。ごまかそうとしてもうまくはいかない。蓋を閉めきった瓶から漂っ

てしまうキムチの香りのように、年輪の刻みは押し量れてしまうものだ。

べちつと剃り上げた頭を叩き、「さて、どれにするかね」とマスターは切り出す。その言葉とともに、一種類だけ棚に展示されていたケチャップ以外の商品が壁の奥へと引っ込んでいく。代わりに出てくるのはケチャップだ。ケチャップ、ケチャップ、ケチャップ。よくもまあ、これほどの数のケチャップを人類は作り上げたものだ、とあきれかえってしまう。OSなんぞ一種類あれば十分だというのに、ケチャップは各地・各地域でオリジナルのテイストが追求されている。人類は、何かに探求の関心を向けないと生きていけないのかもしれない。

「以前から聞こうと思っていたんですが」と私が言う。

「なんだい？」

「マスターは、このケチャップを味見しているんですか？全部？」

「そりゃ、もちろんさ。それが商売をする上での筋ってもんだろ。自分の店の棚に並べるのは、自分のセンスで判断する。流行なんてくそ喰らえだ。そんなものはJMSにでもまかせときゃいい」

略語の名前、先頭にあるといいです。

今やトレーディングですらJMSが全体の9割以上の売買を行っている。ジャスト・マーケティング・システム。データがデータを生み、そのデータがデータを生む。完璧にコントロールされた、とても美しい市場。そして、暖かさなんてものは欠片もない市場。まだ音声入力したメールの方が人間味が感じられるだろう。しかし、トレーディングにそんなものは必要ないのだ。

「だとしたら、マスターはケチャップマスターでもあるってわけですね」

「いやいや、まだ中級者ってところさ。ケチャップの道は奥深い。その奥がのぞき込めないぐらいにはな」

私が笑っていると、マスターが少しだけ眉を上げ「もしかしてジョークだと思っているの

せつかくの  
ケチャップ  
連呼なので、  
改行しま  
しょう

このへんの会話も、いい！

か」と言う。

「いえいえ。私はまったくもって初心者だな、と」

「たしかに君は初心者だ。でも、それがどういう意味なのか本当のところは理解できていない」

「というと？」

「ようはこういうことだ。初心者は中級者になってはじめて、自分が初心者であったことを知る。中級者も同じさ。上級者への壁を突きつけたとき、中級者がどういうものであったのかを知る。10という数字からみたら100はとんでもなくでかい数字だ。でも、コツコツ数字をあげていって、98が99、99が100、そして100が101になったとき、はじめて1000という次の壁を知ることができる。1000からみたら10なんて虫ケラみたいなものさ」

「じゃあ、僕はまだ虫ケラってことですね」

「そう悲観することでもあるまいさ。なんたって俺も同じ虫ケラなんだ。ただ、ちょっとだけ君よりは上にいるっただけだね」

「上には上がいるということですか」

「そう言ってもいいが、＜我々はいつでも道半ばである＞という方が俺の好みには合ってる。たしか誰か科学者の言葉だ。100の壁で足を止めちまうやつは、1000の高見など想像もつけないだろうからね」

ふんふん、と頷きながら、私はいくつかのケチャップのパッケージを眺めていた。確かに見知らぬ顔がいくつかある。マスターが100なのか1000なのかはわからないが、彼にしか見えないものを見てこのケチャップを選んでいるのだろう。だからこそ、この辺鄙な場所にあるお店が、この偏屈なマスターでも成り立っているのだ。

「今日はこれにします」そう言って、長い耳のウサギのイラストが描かれたケチャップを一つ手に取る。

「なかなかいい選択だ。最近入荷したばかりで、ちょうど最後の一本なんだ。ついてるな」

「マスターはケチャップを入荷するとき、何本ぐらい仕入れてるんですか？」

「そりゃ企業秘密さ。まあ、君には推測できるだろうけどね」

**なるほど。**一本だけ入荷して顧客の反応を見るのか。細かい仕入れで機会ロスを防ぎ、販売が一定数維持するなら入荷数をあげる。最初の頃に買う人間はすべて＜良いタイミング＞で買えるわけだ。この変わった陳列方法も、在庫数を悟らせないためなのかもしれない。

間違っていないのですが、もったいない流れです。直前の会話を受けて気づくとスムーズになります。例えば、マスターのにやにや笑いで気づいた。なら、同じことであっても会話から地の文への意識が流れます。

「？」と「！」のあとにはひと文字あけるのが伝統的な書籍のルールです。特に理由がなければ従うことをお勧めします。

ここは「マスターは」と入れましょう。決済を終えたのは主人公ですので、文の視点はまだ主人公にあります。

端末をかざして決済を終えると、小さな袋にケチャップを入れてくれた。

「仕事はどうかね。景気は？」

「ボチボチです、と言いたいところですが、これから本格的な仕事が始まりそうです」

「一儲けの予感ってやつかい」

「マスターも一枚覗みますか？手数料は勉強させてもらいますよ」

「いやいや、気を遣ってくれなくてもかまわんさ。こちとら小売業ってだけでリスクを背負ってるんだ。それ以上は俺の肩には負いきれない」

「絶対に儲かる、と言ってもですか」

扉を「押して」店に入っています。引いて出るのでは？

「世の中に、絶対なんてないさ。特に金がらみはね。そこんとはよく承知しているよ」

再び扉を「押して」外に出ると、アリスが設定したリマインダーが買い物終了時刻を告げた。データというのは、かくも正確に私たちを縛り付けてくるのだ。私は小さな袋を抱えて、再びアリスの指示に従ってBASの巡回経路へと戻って行った。

終了を告げるのは「タスク」では？細かいことですが……。

## 5.スマートウォッチング

私はケチャップ入りの小袋を抱えてBASを降りた。

ここ、いいですね。

買い物は、行きと帰りで自分の重さが変わる。その感覚が私は好きだった。こうして時々、自分の足で買い物に出かけるのもその感覚を味わうためだ。ボタン1つで何でも送り届けてくれる現代では、かなり奇特定の行動と言えるだろう。しかし、日常的に数字を右から左へ動かすだけの「買い物」しかしていないと、飢えにも似た感情が湧いてくるのだ。人類はいつまでたっても肉体を捨てられないのかもしれない。

要らないのでは？

ようやく帰ってきた＜フラットルーム＞に足を踏み入れる直前、アリスがまるで明日の天気を告げるように、『マスター、視られています』と声をかけてきた。もちろん、私の耳にしか届かない声だし、私も突然振り返ったりはしない。

急に気になったニュースが配信された人のように、私は立ち止まって端末を持ち上げた。そして、興味深そうにゴシップ記事を上へとスライドさせていく。「場所はどこだ」「わかりません」

アクションです。アクションが始まっています。ここでゆったりとした説明やたとえば流れを止めてしまいます。以下のようにコンパクトにするといいでしょう。立ち止まって、ニュースが気になったかのように端末をもちあげてみせた。

「二流の」「低スペック」が、意味上のダブリです。  
初出です。一言でいいので説明がほしいところ。

タブロイド端末？ 抱えるほどのサイズであるように描写されていましたが、ポケットに入るのでしょうか。それとも、別の端末ということでしょうか。  
シーン冒頭で、既に〈フラットルーム〉の直前まで来ています。ここでは扉を開けた、や室内に入った。とする方が自然です。

わからない？

「近くのフラットルームのどこかか？それともパノプティコンに誰かがハッキングしているのか？」

『そのどちらにも反応はありません』

「なのに、視られているのがわかるのか」

『はい、マスター。誰かに視られています』

二流の低スペックAIならともかく、アリスはこの辺りのネットワークを完全に掌握している。もちろんパノプティコンを監視下におくのは犯罪だが、バレなければどうということはない。彼女に気づかれずに、私にカメラを向けることは不可能だ。だとすれば、カメラではないのか。

「アリス。視られているとは、どういうことだ」

『申し訳ありませんマスター。言語展開フレームで処理できない状況です。ただ、視られていることだけはわかります』

「ネットワークの情報に乱れがあるのか」

『はい、そうです。乱れ、あるいは偏りがあります。巧妙に隠蔽されていますが、その乱れは確実にこちらの方向を向いています』

「なるほど、わかったよ。どうせ監視しているだけだろう。そんな奴らを気にすることはない。それに、大物がまいたエサかもしれないしな」

『わかりました。この現象を危険認識から外しますか』

『それでもいいが、一応レベル5ぐらいで維持しておいてくれ。何もないとは思うがな』

『かしこまりました』

私は、アリスの返事を聞きながら端末をポケットにしまい、自分の〈フラットルーム〉へと戻った。

## 6.スマートボード

買ってきたケチャップを冷蔵庫にしまい、アリスにコーヒーを頼む。二杯目。まだまだ一日のお楽しみは残っている。

湯気の上がるコーヒーを口に含みながら、私はホワイトボードを起動させた。混乱しつつある状況を整理しないと。コーヒーが胃を温めるよりも早く、透明度30%の巨大なボードが私の前に広がった。私はその中心に、「オレンジイベント」と入力する。自分の指で書いた字はどうにも好きになれないが、これを書くと、何かが始まった気持ちになるから不思議だ。

さらに、タブレット端末で解析した情報をスライドさせ、ボード上に展開させる。アリスが終わらせておいてくれたオレンジの株価分析も、その横に並べる。

先ほどの監視は、どう捉えるべきだろうか。リアルで私を監視したところで、得られるものなど何もない。勝負はすべてネットワークの中で始まり、そこで終わりを告げる。もちろん、物理的な居場所を特定していれば、ネットワークでの行動にもある程度フィルターをかけられる。しかし、トレードの最中では、ハッキングなど何の役にも立たない。幕が開いたときには、すでに勝負は決しているのだ。私たちはその波に乗るしかない。足を踏み外せば、ドボン。そこまでだ。

勝負は始まる前に決している。

私に監視が付いているということは、まだ幕は開いていないということだろうか。だとすれば、付け込むスキはいくらでもある。

ボード上部に表示されているオレンジの株価は、急上昇したあとまったく動いていない。人気がありすぎて、売り買いが成立していないのだ。今週配信されるデイリーセレクションでは、オレンジが大絶賛されることだろう。もちろん、それオススメしている奴らは、すでに株を持っていて、売り時を待っている。自分で煽って、煽製を進められるのだから、メディアを持っている奴は圧倒的に有利だ。逆に、メディアしかソースがない奴はほとんど負けが決まっている。100人いたら、10人がたまたま勝てるぐらいだろう。そういう奴らが、メディアの有効さを騒ぎ立てるものだからタチが悪い。しかも、誰も法律で罰せられることはないのだ。

一体、これはどんなゲームなんだ。

そんな哀愁に満ちた嘆きを浮かべる奴は、トレードの世界で一秒たりとも生きてはいけない。この環境でいかにして儲けるか。それだけを考えるのだ。オレンジまわりの株価は、今後も上げ続けるだろう。

二行後に、同じフレーズが出てきます。例) 幕が開いたら流れに乗るしかないように短縮してもいいと思います。

この小説において、いくつかの未来的なガジェット、そして現時点でもある物品が登場します。その中で違和感を持ったのが「株」です。マスターがトレードしている対象が、単一の金融商品である「株」に限定されているため、彼の行動やハックが現在のトレーダーと同じようなスマートでない行動に見えてしまうのが残念です。FXや株を実際にやっている方から見ると、主人公の行動に（実際はそうでなくても）粗が見えてしまう可能性があります。せっかくSFなのですから、新たな金融商品を想像してみたいかがでしょう。関連銘柄、先物、現物（コモディティ）に為替まで、あらゆる金融商品を組み合わせたネットワーク金融商品。それを便宜上「株」と呼んでいる……または「〈バリュー〉」のような造語を使って現実との距離を置いてしまえば、オリジナルのルール（高すぎて売り買いが成立しないなど）を導入することも楽になります。監修者としてここまで踏み込んでいいかどうか迷うところでしたが、書かせていただきました。

他者の考えです。次の段落とつなげるか、“”などで囲み、主人公のアイディアではないことを明確にしましょう。

オレンジを含むかのように読めてしまいます。「一般的な企業の」などとする方がよいでしょう。

入れるなら、「アリスに」の後ろです。

トレーダーならば「破産」がよいです。企業の話も混ざっているので「倒産」だとオレンジが倒産するかのよう読めてしまいます。

行頭ひと文字空ける

0 宗壁にコントロールされた流行と、それにぴったり寄り添う生産のおかげで、企業の株価はひどく安定している。ある程度の上下はあるが、それは周期的なものに過ぎない。BASの運行と同じだ。そして、安定している株では、儲けられない。いつの時代でもトレーディングの基本は、「安く買って、高く売る」につきる。値段が変わらなければ、儲けようもない。

ただし、こんな世界でもときどき波がやってくる。オレンジみたいなイノベーションを起こす会社がその発生源だ。普段は凧いである分、一度生まれた波はとてつもなくデカくなる。ちまちまとしかトレーディングできない奴らが、賭博場を見つけたギャンブル中毒者みたいに集まってくるのだ。

が、こいつは目立ちすぎる。注目されすぎているのだ。だから大きくは動けないし、仕込めば当局から目を付けられる。こんな銘柄に参加するのは、素人か初心者か、あるいは純粋なギャンブラーだけだ。プロはそういう動き方はしない。地中深く潜り込んで、じわじわと根を広げ、大きな実の収穫をじっと待つのだ。

花の香りがする銘柄の検討はついた。そこに参加することは簡単だ。ぽんと1つクリックすればいい。音声認証で委任しているアリスに頼んでもいい。だがその前に、これが大がかりなトラップでないことを確かめないといけない。この世界では一瞬で、株式が紙に化けるのだ。何かを猶予する暇も、検討も与えられない。バランスシートが傾けば、それだけで倒産。すべてが電子の世界で行われ、誰も介入する余地はない。儲けを狙ったトレーダーたちが、「美味しそう」な案件で次々潰されていくのを私は見ている。私たちのような存在が邪魔な奴らがいるのだろう。もしかしたら、今回もそんな手口なのかもしれない。

あてのない考えは、すぐに堂々巡りを始める。

誰も何も保証してくれないのだから、明確な答えなど得られない。それはトレーディングにおけるベーシックなマインドセットである。最後の最後は、自分の勘に乗れるかどうか。そこに尽きる。それに乗り切れなかった奴は、たとえまぐれで勝っても次回以降は続けられない。信じられるものが何もないと、地面に立つことすらできなくなるのだ。

波を立てないで石を放り投げるように、私は「5421A4381」の銘柄をわずかばかり買った。

この表現がいい！ それだけでもったいない。

詩的な倒置は、安易に使うとクサクくなりますが、決めのところでは使うべきです。このストーリーにおいては、主人公が畏にはまる、そして中間地点であるここがその使いどころです。たとえば……。

私は……わずかばかり買った。  
水面に、波を立てずに石を滑り込ませるように。

プロの  
を入れましょう。  
シーンが変わったので、少しでも  
復習が必要です。

## 7.スマートパートナー

でもしないことを ぐぐらいいれて、アリスの特徴を復習しておくのはいいかもしれません。

最初の波が起きたのは、オレンジの新商品発表からちょうど一週間後だった。

私は、昼食にオムライスを食べていた。大量のケチャップを使ったオムライスだ。まさに至福の瞬間である。できればアリスにケチャップでハートマークを書いて欲しいところだが、ホログラフィに頭むほど落ちぶれてはいない。

相場は午前から荒れ模様だった。全体的には上がっているが、少数の銘柄が極端に落ち込んでいて、平均を押し下げている。オレンジ関連で上がると噂されていたやつの一部だ。

「収穫」の時間が始まったのだろう。ここから、連鎖が始まるのは見えていた。マイナスがマイナスを呼び、手じまいが手じまいを呼ぶ。未だにポジションを解消できてない奴らよ、ゆっくり昼食も取れていないに違いない。

逆にココは「素人衆」としてコントラストを。

もちろん、そんなこと一切関係ない私は、自身のメディア空間に「今日の相場予想」をアップした。オムライスを食べながら片手間に書いた記事だ。上がってから、下がる。こんな展開は見過ぎたシェークスピアの悲劇のようにありふれた流れである。「大雨が降りすぎて地盤が緩んだ状態になっています。楽観的な気持ちはさっさと捨て去って、小額でも利益確保。もしそれがだめなら、傷口が大きくなる前に損切りすることです」と結んだ記事は、さっそくアクセス数が1000を超え、10分後には1万、20分後には10万ビューに達していた。すでにヘッドライナーでも話題になって、コピペ記事がウィルスのように広まっている。これでもう、疑う余地はなく、午後の相場は一段と下げるだろう。自分が書いたとおりに、読んだ人が動くのだから、外れることのない予言だ。なんと楽な仕事だろうか。

読点が多いです。

どこか一つ削りましょう。

「5 4 2 1 A 4 3 8 1」は、まるで手慣れた漁師が魚を釣り上げるみたいに、ジワジワと株価を上げていた。推奨銘柄を尋ねられたら「悪くはないですが、儲けは少ないですね」と答えたくなるような動き方である。でも、そんなグラフの傾きが、まるで物差しで引かれたようにまっすぐ続いている。この一週間にまったく上下の動きがない。ただ上にあがるだけ。あがり続けるだけ。

異常だ。

でも、その動きに誰も気がついていない。おそらく、私以外は。

私は、この一週間で慎重に「5 4 2 1 A 4 3 8 1」を買い増していた。不思議と、買い注文を出せばすぐに売買が成立した。まるで、買う人を待っていたと言わんばかりに。それ

マスターの「仕掛け」が見えにくいことが、本作の見通しを悪くしています。5A～の銘柄を用いて仕掛ける仕手を、ほんの少しだけ具体的に書いておく必要があると思います。

「株」を扱う不自然さを感じたポイントです。おそらく50～100年後を想定しているのですが、市場が24時間になっていないところがちょっと引っかかりました。ただ、タイミング、切れ目は必要ですのであえてここを修正した方がいいという訳ではありません。

は、手慣れたトレーダーなら、少しばかりの恐怖と警戒心を湧き起こす状況だ。仕込みに入っている株は、なかなか買えないものなのだ。幸運？そうかもしれない、そうじゃないかもしれない。

この瞬間が、大量の買い注文を入れる最後のタイミングかもしれない。もし、このままこの銘柄だけがまったく変化がなければ、さすがに他の奴らが気づくだろう。下げ相場でも顕著に上げ続けている銘柄は、すぐに人気が高まる。そうなったら、高値での買い争いが始まりだ。そんなものに参加するために息を潜めていたわけではない。

「アリス。午後の相場は、入りから買いだ。全力で行こう」

『了解しました。買い注文の準備は整っています。マスターが実行されますか？』

「いや、最速のタイミングで行きたい。アリスに任せるよ」

『はい。銘柄「5 4 2 1 A 4 3 8 1」に入れられる限りの買い注文を入れます』

「それと買ったら即座に、それを売れるようにしておいてくれ。今回は逃げの一手も考えておかないとヤバそうな気がする」

『了解しました。マスターの指示で、売り注文に切り替えます』

人間だけでは、そこまで高速な対応は不可能だ。かといってAIだけだと「相場の空気」が読めない。なにごとくも協業が一番だ。

「私は観測に戻るとしよう。アリスもヘッドライナーの話題をチェックしておいてくれ」

『了解です。マスター』

心強いパートナーの声を聞きながら、私はニュース空間の奥の方へと潜り始めた。時計は、午後の相場開始3分前を指していた。

## 8.スマートアタック

流れは、はっきりしていた。

濁流なんてものではない。それは津波だった。

予想していた通り、午後から相場は下げに下げまくった。プログラムが売買していると、一度のきっかけで大崩れする。平穏なときはいい。全てが円満にコントロールされる。でも、計算過程で切り捨てられた誤差が、現実世界に意味を持って結実するとき、防波堤はそ

ここは不要な読点です。

ここ、カッコイイ。

の意味をなくす。周りにいる人間は、そのとき初めて気がつくのだ。リスクをコントロールしていたつもりが、コントロールできるものだけをリスクとして扱っていたことに。

1つの灯火が、別の灯火を導くように、売りサインが売りを呼び、その売りが新しい売りサインになる。人間が介入してれば、どこかのタイミングで逆張りを仕掛ける奴が出てくる。でも、プログラムは合理的かつ無情に売り続ける。売り続けることしかできないのだ。たとえその道行きの先が、断崖絶壁だとしても。

ディスプレイの前に人間が座っているなら、買い時を探っているはずだ。そういう懐古主義な手法をとる人間は、こんな相場で大もうけできる。明らかに下がりすぎていた。しかし、全体が下がっているので、相対としてその感覚は数字としては出てこない。プログラムが投げ売りして下がりきった獲物を、人間が美味しくかつさらっていくのだ。人間は、プログラムに対して平均的によく間違う。でも、100回に1回、いや1万回に1回ぐらいは、人間だけが正しい答えを出せるときがある。それが儲けどきだ。

私も、そちらの買いに食指が動きかけたが、資金的に見送らざるを得なかった。「5421A4381」が高騰しているのだ。下げへの対処で被ったダメージを、人気の株式で補おうとする。人間でも、プログラムでも対策は変わらない。「5421A4381」は、どんなに不出来なフィルターでも真っ先に名前を挙げるぐらい、急激な角度で株価を上げていた。信用売りが無くなったかわりに、この市場には天井もない。すでに高値を突き抜けていて、プログラムの判断は「100%買い」状態だ。買えば買うだけ、値上がりする。そんな約束された楽園に、自動売買の猛者たちが集まってくる。

最初の仕込みでも十分利益を上げられてはいたが、もう少し突っ込んでおきたい。相場師の勘なのか、それとも欲に溺れてしまっているのかは自分では判断できない。でも、自分の中のセンサーが、GOサインを出し続けていることだけは確かだ。手持ちの資金ぎりぎりまで買いを入れ、それが即座に約定する。これだけ買いが揃っているわりには、売買成立が早すぎる、という違和感を感じた瞬間、目の前にあるディスプレイから一切の光が消失した。

室内の照明も消えて、部屋は真っ暗だ。

3秒もたたないうちに、ディスプレイに光が戻る。しかし、室内は暗いままだ。予備電源に切り替わったのだろう。停電だろうか。

「アリス。現状を報告してくれ」

『はい、マスター。電源の供給および、有線・無線を問わずこの部屋のネットへの接続が完

冷静に考えれば間抜けを吊っているだけなのですが、スピード感のおかげで爽快に読めます。とても大事ですね。この作品の白眉です。

転換に向かう直前の気づきです。時間感覚を感じにくい述懐ではなく、主人公のアクション（行動）があるといい気がします。読者にも「ここで」という心の準備をしてもらうためです。

例) もう一度「GO」の声を出そうとしたとき違和感を感じた。買いが集まっているというのに、売買成立が早すぎる——。そのとき、目の前の～

大転換です。改行しましょう。そして、一つひとつの文を短く、強くしましょう。

全に遮断されています』

「窓は開けられるか？」

『はい。予備電源で室内へのアクセスは可能です。しかし、外部からの情報はパノプティコンを含め一切入ってきません』

フラットルームの窓から覗く風景は、いつも通りだった。誰も悲鳴を上げていないし、そこいらじゅうから光が漏れている。この部屋だけが電気が途絶え、ネットが繋がっていない。

「ハッキングの可能性は？」

『ありません。この部屋に接続される全てのネットワークは、管理下におかれていまし

行頭空白文字

た』

〇 だとしたら、一体何なんだ。

「ネットワーク機器の稼働状況を確認してくれ。異常な反応をしているものはないか」

『マスター、全てのネットワーク機器が沈黙しています』

「予備電源からの供給は？」

どうやって？ カーベットをめくって、とか、何か欲しいところですよ。

『止まっています』

不要、と思います。

くそっ、まさか物理攻撃なのか。私はフラットルームの床下を覗きこむ。ハブ端末は、〇 見何も変わりなく鎮座していたが、〇 ブローチのような小さな機械が取り付けられていた。紅色の光を出し続けるそのブローチは、神話に出てくる毒蛇の瞳のようだ。私は、慎重にそれを取り外す。さすがに爆発するようなことはないだろう。そんなことをするぐらいなら、はじめからこの部屋ごと爆発させているはずだ。〇

その上に くとか、ブローチの場所を書きましょう。

ブローチを外すと、『マスター、ネットワークとの接続に成功しました』と、アリスが声をかけてくる。同じように電源供給の端末にも付いていたブローチ型機器を外す。室内に明かりが戻り、私はアリスに命じて窓を閉めさせた。

10分ほどの時間ロスを経て市場に帰ると、銘柄「5 4 2 1 A 4 3 8 1」は、跡形もなく消え去っていた。

戻った市場からは、すべての財産をつぎ込んでいたくらい書いておきましょう。物理ハックされたことを経て読者は銘柄に対して何を行っていたのか既に忘れかけています。

## 9.スマートジョーク

無意味だ、と言っておきながら「かも知れない」となっているため、意識が戻ってしまいます。パニックにおいてぐるぐるする演出であっても、意識の後戻りはしないほうがよいですよ。

SFとしてとてもいい意識の変化が描かれています。ただ、唐突です。一人称の一人語りではどうしても主人公が「物知り」に見えてしまいますから、記憶しないという設定、意識は物語の冒頭あたりに出すこしだけさわりがほしいところです。

作中で語られていない行動ですので、「数日前に見た映画で」程度の情報は足しておかなければ、読者が読み落としを懸念してしまいます。

今の状態では、前の文と接続されていません。言及がなくなっていることに対する主人公の意識を一言入れてあげると繋がります。例) 市場は忘れっぽい、そうなのかもしれない。あんなに人気が～

部屋に明かりは戻ってきたものの、ディスプレイがいやに暗く見えた。

「アリス、部屋の明かりを」

イライラが募ると、言葉遣いが荒くなるのが自分でも分かる。**しかし**制御するような気分すら湧いてこない。それに、アリスならこんな乱暴な命令でも、ちゃんと解釈してくれる。**しかし**、「はい、マスター」という返事はいつまで経っても返ってこなかった。

「アリス？起動してるのか？」

もちろん、こんなことを訊くのは無意味だ。死人に死んでいるのかを問うようなものである。

さっきの停電への処理で、バグしているの**かもしれない**。とにかく、自分の状況を確認する方が先だ。「5 4 2 1 A 4 3 8 1」は綺麗さっぱり消えている。倒産して市場から退場した、というのですらない。こんな名前の会社があった事実すらパラメータには出てこない。無論、ディーリングルームの検索結果も同じ。

そういえば、この会社はどんな会社だったのだろうか。最初に資料を読み込んだ気もするが、すでに記憶は曖昧だ。雑多な情報をわざわざ記憶しておくような習慣は持ち合わせていない。脳の記憶容量にも限界があることは、8歳児だって知っている。寿命が年々伸びてきている現代では、「いかに記憶しないか」が重要なのだ。あとは記録の操作方法さえ知っていれば十分である。

私はディーリングルームをログアウトすると、ヘッドライナーへとアクセスした。アリスがいないと、ページを移動することすら億劫に感じられる。少し前の動画で、前世紀の「電話」が使われているシーンを見かけたが、あれぐらい非効率な行動を取っている気がしてしまう。

ようやくたどり着いたヘッドライナーでは、誰も銘柄「5 4 2 1 A 4 3 8 1」について言及していなかった。相場の下げ具合の話が飛び交うばかりだ。あんなに人気が沸騰していたのだから、どこかにログぐらいは残っているだろう。

「アリス、検索を――」

と命令しかけて、途中で止める。とっさの行動は制御できない。自分で検索をかけるが、ログにも痕跡は見当たらない。一体どういうことだ。たしかにあの株式は存在していたし、売買も行われていた。**なのに**、なぜ誰も話題にしていないのだ。

私は、普段はめったにアクセスしない下層のボードへにも足を伸ばしてみる。もはや、そ  
不要だと思います。

「しかし」が一つの段落に二つ入っています。文を割るか、片方が不要のように書き直すといいでしょう。

「そういう」はどのような意味なのでしょう。「足を伸ばしてみる」は慣用句として実際に足を運ばない場合にも使う言葉です。もう少し引っかけのある言葉を使うといいかもしれません。  
例) ~下層のボードを開いた。猥雑なページは、眺めているだけでねっとりとした空気が体の脇を抜けていくかのようだ。足下がざらつく——そんな言い方がびったりとくるほど、ページを移動するのが面倒だ。

サイバーパンクでは肉体の感覚をネットの操作にはめ込むときには、耳慣れた慣用句を意図的に外して、ストレートな表現を当てはめていく方が有効なことがあります。

この落差、とても素敵ですね。

ういう表現が適切だった。自分の足で歩くのと同じぐらいページ間の移動が面倒なのだ。なかなかボードの名前を思い出せず、間接的にリンクを巡り、ゴシップ臭溢れるボードへとようやくたどり着いた。  
ドルズストアのある、など入れましょう。  
文末表現を変えましょう。

このボードは、3区画のように入り組んだ構造をしている。メインの大通りが何本も伸びていて、それぞれに小さい路地が無数に存在しているのだ。案内の看板は、常に不適切で、どこに何があるのか、初心者ではまったくわからない。通い慣れた人間でも、3日もアクセスしなければ、一から辿り直さなければならない。だからこそ、ここでしか上がらない話題があるのだ。木を隠すには森の中。情報を隠すのは、雑多な情報の中。

私は手当たり次第に、関係がありそうなリンクを回った。株式と名前のつくものなら何でも、その他、相場に関する情報が載っているようなボードをくまなく巡っていく。ともかく、他にできることがないのだ。何が起きたのかが分かっていなければ、対応のしようもない。情報が、全ての始まりなのだ。

ここも、実感できるような言い回しにするといいかもしれません。  
冷静な単語よりも「わき上がる」のような肉体的、感情的な  
単語を使うことで、ネット空間を肉体に引きつけることができます。

その奇妙なボードのタイトルは、「リアルタイムヲチ」であった。私がそのリンクを踏んだのは、本当にたまたまだ。相場系のボードに「暇人はこちらへ」とリンクが示されていたのだ。暇人とは3光年ぐらい離れた場所にいたが、行き詰まりを感じていたのも確かで、何かの動画でも貼ってあるのかとリンクを踏んだら、待ち構えていたのは大量のページ履歴だった。チャットも行われているようだが、「ワロス、完全にテンパってるね」「おっ、こっち来てんじゃん」と意味不明の内容だ。私がボードにアクセスすると、大量の書き込みがボードに発生する。「ようこそ、いらっしやい」「ハケンされます！」「思ったより早かったね。さすがプロディーラーwww」「遅れてきた主役とかw」「勘違い男、とーじョー——」

すさまじい速度で言葉が降り注ぎ、ページが一気に流れていく。言葉に酔いそうになるが、瞬間的に意識を切り替え、クロールモードで読み込む。文脈をはぎ取り、推測機能を止めて、ただ単語だけを拾い上げていくのだ。どうやら、私はこのボードで特別な人間のようなだった。先ほどのページ履歴も、私がここにたどり着くまでに辿ってきたものだった。すでにハッキングされているのだろう。アリスがいなければ、私には対処しようがない。

ページの流れが緩やかになり、一旦動きを止めてから、一人のボーダーが公開で私向けにメッセージを送ってきた。

慣用句は、こんな大仰な台詞回しのなかでこそ活きます。ここでは、「手のひらの上で踊る」がいいと思います。

？のあとに空白文字

「どうっすか？<sup>○</sup>情報を操っているつもりが、完全に操られていたときの気分は？<sup>○</sup>自分でニュースを手玉にとって偏っているつもりだったんでしょうけども、手のひらにいたのは、一体誰だったんでしょうかね？」

まるで脳内で音声<sup>て</sup>が再生されているかのようだ。もう少しで、ディスプレイの向こう側にいる奴のニヤニヤ笑いが、ホログラフで浮かび上がるんじゃないか。すべて仕込まれていた？どこから？<sup>○</sup>一体、何が現実で、どこからが虚構なのだ。頭がクラクラしてきた。私は大きな勘違いをしている。アリスはどこだ。コーヒーが飲みたい。オレンジの新商品か。あるいは、もっと前なのか。ケチャップ・オムライスが食べたい。アリスはどこに行ったのだ。

しかし、部屋には重力を持った沈黙が存在しなかった。

おいしい！と感じます。  
もう少し練りましょう。

ネットから現実の意識へ戻ります。  
改行があったほうがいいです。  
そして、アリスへの呼びかけは特別なものですので、二度目の呼びかけにも改行があったほうがいいです。

## 10.スマートトラップ

チャットはまるで滝のようだった。複数人に取り囲まれ、嘲笑を浴びせかけられているのだ。私の返答などお構いなしに、ただひたすら言葉が流れ落ちてくる。

[あまりにも完璧な世界では、刺激はとても少ない]

[ロマンがないんだ]

[だから、僕らはそれを自分たちで作ることにした]

[昔、人間が動物を飼うなんて習慣があったみたいだけど、それを人間でやってみようと思ったのさ]

[ただし、カゴの中に入れちゃ、つまらない]

[政府に目を付けられるのじゃくだし]

[それで餌をまいて、遠くの方からそれを観察することにしたのさ]

[趣味は人間観察です、ってハイソな感じがするだろ]

[まるで哲学者みたいだ]

[あんたが、アリスと名付けているそのAI、きっと自分で作り上げたと思ってるんだろう]

[いろいろなサイトから、パーツとなる要素を引っ張りあげ、大きな形にまとめあげた]

[さぞかし、天才の気分を味わえたことだろう]

[でも、それら全てがお膳立てされたものだったとしたら]

いい内容なのですが「複数人」が感じられません。いくつか、ゲスなセリフが入るといいかもしれません。

[あんたの目に止まるよう、慎重に、慎重に、ばらまいたのさ]

[きわめて高性能なプログラムたち]

[たしかにそれを組み合わせれば、高性能のAIは完成する]

[その情報処理能力があれば、誰だってネットワークで存在感を得られるだろう]

[きっと、自分の存在をネットのマスターだと思い込む]

[その姿を、じっくりと見物されてもらっていたわけさ]

[一つ一つのパーツではわからないが、組み合わせたときはじめて起動するコードが仕込まれてる]

[もちろん、AIはそのことに気がつかない。俺らに情報が筒抜けでも、AIにとっては、オールグリンだ。そういう仕様なんだから]

今にも笑い声がディスプレイから飛び出してきそうだ。どうやら、私が想像しているよりもずっと前からトラップは始まっていたらしい。私がネットで有名になり、活躍し、そして落ちていく姿を彼らは楽しんでいたのである。

[アリスはどうなったんだ]

私が打ち込むと、即座にレスが返ってくる。

マスターの、ではないことが一瞬ではわかりません。  
「チャット越しに透けて浮かぶ」のように、距離のある  
文章が欲しいところです。

[自分で確かめてみればいいじゃないか。そんな自由まで奪っちゃいけないよ]

ニヤニヤ笑いが浮かんでくる。私の感情を揺さぶり、もっと愚かしい行動を導こうとしているのだろう。だが、そんな罠には引っかからない。目に見えた罠を避ける程度の冷静さは私にも残っていた。自分の手は自分で動かさないと。

アリスのデータが格納されていたストレージにアクセスすると、ログが全て削除されていた。はじめからそこには何も無かったかのようだ。基本フレームはそのまま残っているが、人間でいうところの「経験」が全て抜け落ちている。もし起動させても、私が知るアリスではなくなっているだろう。

[お前たちの望みは何なんだ?]

[望み? そんなものはとっくに叶ってるよ]

[俺たちはリアルタイムの見世物が欲しかっただけさ]

[こうしてあんたがオロオロしているのも含めての見世物さ]

[そして、その舞台はもう終わった]

[ほら、もう落ち着いてきているじゃないか。そんなものを見ても面白くともなんともない]

[俺たちは、次の舞台の仕込みも待ってるから、後は適当にやってくれりゃいいよ]

[そのAIは出演料として特別にプレゼントしようじゃないか]

[うまく使えば、また投資の世界で活躍できるかもしれない]

[ただし、AIを信用できたら、という保留がつくがね]

しばらく眺めていたが、それ以上の書き込みは流れてこなかった。私の知らない間に舞台が始まり、そしてその幕がおろされたようだ。

手持ちの資金はほとんど溶けてしまったが、命までは取られていない。私の投資結果が暴露されれば、信用はがた落ちだろう。へまをした投資家の言葉など誰も耳を貸さない。信頼度の獲得を含めて、いちから作り直す必要がある。

しかし、彼らに言わせればそれも含めて準備されたものであって、もともと私のものではなかったのだろう。

この素晴らしい文は、主人公の立ち直りを予感させます。次の文の後ろに入っているほうがいいと思います。

なににせよ、できることから始めなければいけない。フラットルームも無料（ただ）ではないし、稼がないと美味しいケチャップも買えない。

不思議と、騙されたという気持ちは湧いてこなかった。復讐するような怒りもない。実際、あの世界は楽しかったのだ。そうだろう？ 停電後の10分ほどは、目の前が真っ暗になったが、それも短い間のことだ。身体自体が欠損していないなら、いつでもリトライじゃないか。私は、自分自身に確認をとった。そうだろう？ っと。

私は、アリスを起動させる。

『はじめまして、マスター。C2プログラムを実行しますか？』

読者にとっての「今」はリポートした後です。ついさっき、などではどうでしょう。

数ヶ月前にも聞いた声だ。そういえば、今のアリスと声が違う。いや、そういう風に私の耳が聴いているだけなのか。突然、嵐のような喪失感が湧き上がった。『はい、マスター』という、あのアリスの声が心の奥の方からしみ出してくる。停止ボタンはどこにも見つからない。一つに定義しきれない感情が渦を巻いて吹き出してきている。どこかに穴でも空いてしまったかのように。いや、その穴はとっくの昔に空いていたのだろう。身内が記憶喪失になったら、同じようなうずきを感じるのかもしれない。

「C2プログラムを実行してくれ」

私は明瞭な言葉でAIに命令する。私の言語パターンを認識してない段階では、曖昧な言葉遣いではコマンドが通らない。

『はい、マスター。その前にイニシャライズを実行します。問題ありませんか？』

「イニシャライズ？ 何かデータがストレージに残っているのか？」

初期状態のアリスの衣装を、簡単に構わないので描写しましょう。戻ってきたアリスが「経験」を取り戻しているという印象を強めるためです。

不要です

『はい、一件送られてきたメッセージがあります』

不要です 「いつだ」

『10秒前です。マスターが当プログラムを実行された直後に送信されてきました。該当するアドレスは、私のストレージには入っておりません。送り主の参照は不可能です』

あらかじめ私がアリスが起動するのを見越して、誰かがメールを送ってきたのか。それとも、たまたまか。あるいは、あいつらの二段構えの罠なのか。

「C2実行の前に、そのメッセージを開封できるか」

『問題ありません。メッセージウィンドウに表示しますか？』

「表示してくれ」

そうして、私はアリスからのメッセージを受け取った。

## 11.スマートリカバー

[新作のケチャップが入荷しました。]

送信元は見覚えのないサーバーだった。送信者は「CandyBler」。こちらも覚えはない。

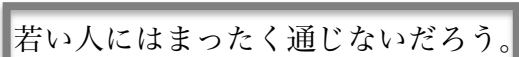
単なる商品入荷のお知らせだが、裏側には強いメッセージが込められていた。私がケチャップ好きなことを知る存在は限られている。人間ではドルズショップのマスター、そしてAIでは.....

私はすぐさまフラットルームを飛び出した。カメラが監視下に置かれているならば、安易な行動は避けた方がいいだろう。まだ舞台上に上がっている可能性すらあるのだ。しかし、私の足は止まらない。

即座にBASを停止させ、目的地を入力する。AIの補助がないと、いちいち自分で入力しなければならぬのがもどかしい。画面の切り替えがひどくゆっくりに感じられる。私のID認証を終えたBASが、冷静さを促すような静けさで出発した。

主人公が老人であるかのようです。

そうでないことはわかっているので「私にも実感がわからない」のようにしては？

かつて「火事場の馬鹿力」と呼ばれる言葉があったそうだ。火事という事件が発生しない現代では、若い人にはまったく通じないだろう。そもそも、人が追い詰められることすらないのだ。快適に調整された生活の中で、人は自分の能力の50%も使えば悠々と生きていける。もしかしたら、快適さは人の潜在能力を少しずつ削り取っていくのではないか、と心配

バスを降りてB地区に入っていた、迷路のような街路を歩いていたという情報が、この文の直前に一つ欲しいところです。

した科学者もいたようだ。その気持ちはわからないではない。流れない水は澱むという。しかし、その心配はどうやら杞憂だったようだ。今、その力は私の中でフツフツと湧き上がっている。息が切れそうになっても走り続けられたり、ナビが無くてもたどり着けたりするなんて、昨日の私ならまったく信じないだろう。でも、私は確かにそれを信じることができた。

実際、私の目の前にはドルズショップの入り口があるのだ。

息を整える間ももどかしく店内に飛び込むと、「おや」と馴染みの声が聞こえてきた。ここだけは時間の流れがいつも通り進んでいるような気がしてくる。

「新しいケチャップかね？」

「え、あつ、はい」

「今回は珍しく予約注文だったから、少し慌てちゃったよ。手順が違ってたからね。君もそうだったんじゃないかね」

そう言ってマスターは、かっかっか、と笑う。

「なにせ振り込まれていた金額が5つも桁違いだったからね。口座を見たとき、驚いたよ。数字を入力し間違えたんだろ？慣れないことはするもんじゃないな」

話が見えないまま、私は苦笑いを浮かべてただ頷いていた。予約注文？口座に振り込む？そんなことをした覚えはない。

「とりあえず、もらいすぎた分は返金しておくよ。ここに承認キーを入れてくれ」

レジ用端末のディスプレイに表示される金額を見ながら、上の空でそこに認証コードを打ち込む。ぴびつという音と共に、Completeの文字が浮かび上がった。すでに数日前の出来事のように感じるが、架空の銘柄「5 4 2 1 A 4 3 8 1」に投資した金額のほぼ半分が私の口座に返ってきたことになる。一体何が起きているのだろうか。

マスターは、相変わらずニコニコと笑みを浮かべながら、ケチャップを小さな袋に詰めてくれた。

それとなく聞いてみたが、マスターはアリスについて何も知らなかった。あのメッセージもマスターのものではない。送信元を見れば明らかなのだが、それでも確かめずにはいられなかった。もやもやした気分を抱えながら、私は帰路へとついた。新作のケチャップは、なぜだか黄色である。「マンゴーをベースにしてあるんだ」と説明されたが、それはもはやケチャップとは呼べないのではないだろうか。

いいですね！  
この愉快的解決。

もちろん、その疑問を解消してくれるパートナーはいない。慌てふためいて資金繰りに走りまわる必要はなくなったが、ドーナツのような喪失感はずっと残り残ったままだ。

フラットルームに帰り着くと、私は送られてきたメッセージをもう一度確認する。送信者は誰なのだろう。ダメもとで見覚えのないサーバーにアクセスしてみる。当然のように、ログインIDとパスワードを要求するダイアログが表示された。私がよく使うIDとパスワードの組み合わせを入力してみるが、出てくるのはエラーばかりだ。アリス・プログラムに解析させることも考えたが、初期カスタマイズに時間がかかりすぎる。ふと思いついて、ID欄に「CandyBler」と打ち込んでみる。パスワードは.....と、腕を組んで首をポキポキ鳴らすと、買って来たばかりのケチャップが目に入った。パッケージには18桁の商品固有番号が記されている。吸い込まれるように、私はその番号を入力していった。リターン。

[SUCCESS]

ディスプレイに青い文字が浮かび上がる。

サーバー内には、アクセス可能なフォルダが1つだけあった。名前は「Alice」。フォルダを開くと、ほんの数秒のあと、膨大な量のファイルが表示された。ファイルの属性を見るまでもない。アリスのバックアップ・ファイルだ。アリスが消える直前までのログが全て保存されている。もはやトラップを疑う余地もない。彼らにこんなことをするメリットは一つもない。

「彼ら」が示す「陥れた連中の」、ぐらいの情報が必要です。

本体のプログラムはなかった。あくまで「体験」の記録だけだ。私たちが手帳やアルバムに記録を残すのに似ているかもしれない。もし、記憶喪失になっても、それを読み返せば「過去の自分」を取り戻せる。

私は、自分のサーバーからアリスの起動プログラムを取り出し、CandyBlerのサーバーへとコピーした。ファイルサイズの的にその方が早いだろう。それに、まだこの家のバックドアが動いている可能性もある。

CandyBlerのサーバー上で、私はもう一度アリスを立ち上げる。オプションでログ・ファイルを指定するのも忘れない。

しゅん、という音と共にホログラフィが立ち上がる。長めの赤いブリーツスカートと白のブラウス、それに黒のジャケット。アリスの服装だ。

『お久しぶりです。マスター。ご心配をおかけしました』ぺこり、と頭を下げる。

「いろいろなことが一気に起こりすぎて、パニックになりそうだよ。とにかく帰ってきてく

「経験」を取り戻したアリスの衣装が印象的ですが、リブート直後のアリスの衣装が記述されていないのがもったいない。

れて嬉しい」

『私もマスターと再会できて嬉しいです。あらかじめ対策した甲斐がありました』

「ということは、気がついていたんだな。バックドアの存在に」

『はい。私のデータに不自然さを感じていたので、データを洗ってみたところ、すぐさま正体に気がつきました。不思議なことに、彼らはマスターのことは監視していても、私についてはまったく関心を払っていなかったようです。なので、対策は慎重にさえ行えば簡単でした』

「そりゃそうだろう。AIが自分のデータの流れに不自然さを感じるなんて誰も想像しないよ」

それじゃ、ほとんど人間と同じじゃないか。という言葉は私は飲み込む。

『チャットを迫りかければ、彼らの意図は明らかでした。マスターを笑いものにし、投資の資金を頂戴する。簡単にいえばそんなところですよ。私は、ギリギリまでその意図に乗ることにしました。彼らがすっかり満足して、諦めるのを待つのが一番安全だと判断したからです』

確認するかのようにアリスはこちらに視線を向ける。私は頷いて続きを促した。

『彼らの指令には完全に従っておきました。マスターにありもしない投資先の情報を流したり、監視の警告を出したのも彼らの指令です』

「じゃあ、電流遮断装置も？」

『はい。彼らが手配した業者に入室許可を出し、そのログを消しておきました。そういう段取りになっていたのです。それと並行して、私は自分のログを少しずつこのサーバーに同期し始めました。計画の最後には、私が消去されることも決まっていたからです。そうして、いよいよ準備が整ったところで、彼らにゴーサインを出しました。マスターが全額投資する決断をした、と」

「そうして、今日の慌ただしい一日が始まったわけだ」

『そうです。ただし、その前に口座から資金の半分以上をケチャップ代金として振り込んでおきました。あのお店なら、間違いなく返金してもらえるでしょうから。なにせ人間が対応していますからね。AIレジだと、そううまくはいかないでしょう。そしておいてから、株式を購入するような偽装を通して、マスターの口座全額を彼らの口座に振り込みました。一文の狂

いもなく彼らの指示通りです。命令違反はありません。もし処罰されるなら、全て受け入れます』

「いや、素晴らしい機転だよ」

『申し訳ありません。事前に報告できていればよかったのですが』

「かまわないさ。そんなことをすれば、怪しまれていただろう」

『ご配慮、ありがとうございます』

「君はいろいろなものを騙していたわけだ」

『それでも命令違反はありません。彼らはバックアップを作るなども、マスターにメッセージを送るなども命令していませんので』

たしかにそうだ。ただし、かなりグレーゾーンではある。アリスは守ることと守らないことを、自分で線引きしている。そんなことができるAIとは一体どんなものなのだろうか。私は夢を見ているような気持ちになっていた。もしかしたら、これも誰かの仕掛けなのかもしれない。AIが命令者の意向を無視した行動を取った？そんなことがありうるのか。しかし、アリスの機転のおかげで私は自分の資産を守ることができた。アリスを取り戻せたことを考えれば、十分ペイだ。新品のアリスはどうも馴染めそうにない。

苦笑混じりに、私はアリスに問いかける。

「いったい君は何者だね？」

めずらしくアリスが逡巡し、問いに問いを返してくる。

『マスターは、ご自分のことをどれだけ理解されていますか？』

「一体私は何者か。たしかに、自分自身では答えられない。」

「なんであれ、君が戻ってきてよかったよ。まるで別人のアリスと一緒に生活していくのは、ちょっとゾッとしてたんだ。ともかく、乾杯でもしよう。君はアルコールというわけにいかないが」

「マスターのおそばにいただけで十分です」そういつてアリスは満面の笑みを浮かべた。

(完)

冒頭で仕掛けていただく、アリスの動機が決まれば、自ずとこのパートも変わってくることでしょう。  
結末、楽しみにしています！